



愛すべき国★ベトナム

My Dear VIETNAM

市場 嘉輝

ICHIBA Yoshiteru

株式会社日本港湾コンサルタント
CALs/EC室/室長

1. はじめに

数年前に海外業務部からベトナム出張の打診があった。海外業務の経験のない自分が果たして対処できるのかという不安と、未だ行ったことのない彼の地を見てみたいという感情が交錯した。

プロジェクトは複数年に渡り実施されるもので、この間、多い時には現地事務所に50人を超える日越のエンジニアが常駐し作業をすることとなる。幸いにも同行するスタッフは、海外、特にベトナムのプロジェクトに関して経験豊富な者が多く、本プロジェクトの舞台となるホーチミン市の長期滞在経験もある。

こうして、一抹の不安を抱きつつもプロジェクト開始のための先発隊として、本隊に先んじてホーチミンへ乗り込んだ。事務所開設に携わることから始まり、その後、断続的にベトナムへ赴くこととなり、結果的に合計2ヶ月程度現地に滞在することとなった。



■写真1—この建物の3階がオフィス

2. ファースト・インプレッション

うだるような暑さと湿気の中、ホーチミン市にあるタン・ソン・ニャット国際空港は出迎えの人達でごったがえしている。市内の宿泊先までは、ホテルが手配してくれたワゴン車によるデリバリーとなった。空港の駐車場を出たワゴン車は市の中心へと進む。しかし、午後11時だというのに、なんとというバイクの数だろうか。まずはそのバイクの数に驚く。次に引切り無しに鳴らされるクラクションの騒音がまた凄い。それに加えバイクの3人乗り、4人乗りは当たり前、中には5人以上乗っていると思われる猛者までいる。

3. ファースト・ミッション

プロジェクト先発隊の使命は円滑かつ早急に事務所を開設し、後続本隊の受け入れ態勢を整えることである。まず、最初に手をつけた仕事は事務所のロケーシ



■図1—ベトナム社会主義共和国の位置図(出典：外務省ホームページ) ■図2—ベトナムの国旗



■写真2—暑い中ご苦勞様です



■写真3—入居前



■写真4—入居後



■写真5—「位置について、よーい、ドン!」



■写真6—正統派スタイル(?)の女性ライダー



■写真7—バイクで何でも運びます

ョンを決めることである。いくつかの候補を探し、貸借料や交通の便を勘案した結果、コロニアル風の佇まいを見せる瀟洒な3階建ての建物と相成った。

事務所のロケーションが決まると、次は什器類とOA機器の手配である。机や椅子だけでなく、電話、FAX、コピー機、レーザープリンタ、インクジェットプロッター等を発注。同時に電話回線やインターネット回線(ADSL)も契約した。

4. ミッション・インポッシブル?

しばらくして、事務所へ什器類やOA機器が納品され、いよいよ事務所で仕事ができるように環境を整備する段となった。このような状況の中、事務所内へ敷設するLANケーブルは業者に作成してもらうこととした。その方が「必要な長さのケーブルを安く購入することができる」との話だったからである。机の配置と事務所の広さを勘案し、予備を含め様々な長さのLANケーブルを数10本ほど納品してもらった。

ところが、実際にパソコンを接続して導通テストをしてみると繋がらないケーブルがある。確認のために端部のコネクタ部分をよくよく見ると、なんと結線を間違えているのではないか。これでは絶対に繋がるはずがない。もしかしたらと、残りのすべてのケーブルのチェックを行ったところ、1割程度のケーブルが色違いに結線されていることが判明。同じ色の銅線を両端のコネクタに結線す

るだけの作業なのだが、色の区別がつかない訳でもないだろうし、一同啞然。

両端のコネクタの接続不良で繋がらないことはあるにしても、色を間違えて結線することは、日本ではまずあり得ない。このように、日本では当たり前と思えることが徹底できていないところが、南国らしいだらかさというべきであろうか。しかし、LANケーブルの歩留まりがこれほど悪いとは思わなかった。そもそも自作したLANケーブルをチェックもせずに納品するとは…。我々が要求する品質の確保は、ベトナムではmission impossibleなのだろうか。

これは後日知ったことだが、ベトナム人が電気製品等を購入する際には、その場で動くことを確認してから金を払い持ち帰るのが普通であるとのこと。したがってこのケースも、買い手である我々がケーブルのチェックを行い、不良品に関してはその場で文句を言えば良いという事らしい。

5. 一筆書きの妙

事務所内の机の配置は、業務を円滑に遂行するために土木、建築、電気、設備といった具合に業務分野ごとのシマをつくることにした。そして、途中のケーブルやハブの故障が全体に影響しないようにインターネットへの出口となるルータから各シマへLANケーブルを敷設し、このLANケーブルをシマごとにハブで各パソコンと接続する計画とした。ローカルの業者へその旨を重々説明し、



■写真8 元気がない犬。一年中夏バテしているのだろう ■写真9 シーフードレストランでは、陳列している食材を
まず選び、調理方法を注文
■写真10 蟹さんも待機中か・・・

我々日本人スタッフは、各々担当業務をこなしていた。

この業者は、事務所内におけるLANケーブルの敷設作業に際して、モール(ケーブル類を床や壁にまとめて通すための樹脂製のカバー)を床に引いてある絨毯の下に這わせ、スタッフがつまずかないように、なるべく机の下を通す丁寧な作業をしているように見えた。数時間後、作業が終了したので見て欲しいと言われ、フロアの隅の方へ招かれるまま移動した。そしてこの業者は、一番末端のケーブルからインターネットに繋がることを誇らしげに我々日本人スタッフへ見せ、チェック一発、ケーブル敷設作業が終了したとのたまうのである。

しかしよく見ると、シマごとにハブを配置し、このハブをケーブルで順番に接続しているのではない。まるで、一筆書きである。これでは途中のケーブルが断線したり、ハブが壊れたら、その下流側は全滅である。いくら口を酸っぱくして言っても、全然聴いてもらえない。こちらから指示もしていないモールを使った過度に丁寧な敷設作業と裏腹に、こちらの指示や要望はどこ吹く風なのである。このようにベトナム人は思い込みが激しいように見受けられる。



■写真11 ローカルスタッフとのコミュニケーション。この後カラオケで二次会(日越カラオケバトル)と相成った <(^◇^) (^◇^) (^◇^) >

6. ベトナム人は合理的か?

一般に海外での業務において、日本人スタッフはノートパソコンを現地に持ち込む。これは現地へ赴く際に使い慣れたパソコンを手荷物として機内に持ち込むことで、盗難や乱暴に扱われて故障することを防止できることや、途上国で頻繁に発生する停電にあっても作業が滞ることがないことなどによる。

一方、ローカルのスタッフは、ノートパソコンは割高で部品の交換などの制約を大きく受けることから、ほぼ全員がデスクトップパソコンを使用している。面白いのは、これらのパソコンが大手メーカーの製品ではなく、汎用の部品を組み合わせた秋葉原のパーツショップ等で売っているような機種であることだ。これはコスト、拡張性、部品の交換や再利用等を考慮してのことらしい。

日本では、企業で導入するパソコンは故障の際のメーカー保障のリスク等を勘案して、大手メーカーの製品を導入することが多い。これに比べて、ベトナムでは上記のように汎用部品を組み合わせた自作パソコンの導入が多いようだ。トラブルの際には自力でどうにかしてしまおうとする国民性が現れているのだろうか。そういえば、ベトナムでは、高級車もオートマチック車ではなくマニュアル車を多く見かける。これは、自国でメンテナンスを行うためには、シンプルな構造の方がやりやすいことがその理由であるとのことだ。真偽の程は別として、なんとなく納得してしまう話である。つまり、ベトナム人は、自分たちで分解や修理をやってしまう方が、第一安いし、そのための手間を厭わないようだ。また、手先の器用なことも背景にあるのだろう。

また、驚いたことに、CADオペレータを含め多くのスタッフが、時代遅れともいえる15インチのCRT(ブラウン管式)モニターを使っている。そこまで節約しなくても思われるのだが、現地での物価を考えると納得してしまう。確かに現地の通貨レートを勘案すると、浮かせたコスト

は彼等にとって10倍以上の価値となるのだ。また、ノートパソコンとの比較を考えると、15インチのモニターでも決して小さいとは言えないのである。

それから、ベトナムでは頻繁に停電することから、すべてのデスクトップパソコンには小型の無停電装置(UPS)が接続されていた。思わず「サーバーか!」とツッコミを入れたい。しかしながら、このUPSの効果は絶大で、度々起こる停電によっても、作業が停止することはなかった。UPSに対する投資が見合うものと彼らは判断しているのだ。

7. ホーチミン徒然草

ベトナムでは、インターネット回線が時々通信できなくなる。これはホテルでも起こる。理由は不明であるが割と頻繁に発生する。最初は大騒ぎしていたが、馴れとは恐ろしいもので、こんなものかと思うようになった。個人ではどうしようもないことなので腹をくくるしかない。

ホーチミンでは雨季にはほぼ毎日スコールが降る。このスコールがまた曲者なのだ。建物の最上階である3階が事務所なのだが、土砂降りの雨が屋根に当たる音が凄いのである。電話の声は聞こえないし、事務所内で話をする際にも大声で話さないと聞こえないのだ。まさに轟音といっていい。ベトナムで最上階の部屋を借りる時には、スコールの時に見分する必要があることを痛感した。

また、事務所の入っている建物は24時間体制でガードマンが常駐し、エントランスで入退室のチェックを行っている。驚いたことに、3階にある事務所の戸締りをする際にはガードマン立会いの下、施錠とともにドアに紙を糊付けして封印をするのだ。そして朝一番に来たスタッフがこれまたガードマン立会いの下、封印を破り、鍵を開けるのである。

事務所へは徒歩での通勤である。わずか10分程度の道程なのだが、この間、何度となく声をかけられる。ただ、道を歩いているだけで、道端の物売りから「買わないか?」と声をかけられ、シクロと呼ばれる3輪自転車やバイクタクシーが「乗らないか?」と、やたらとちょっかいを出してくるのだ。

また、国営のスーパーマーケットや百貨店以外では原則として値札はなく、価格交渉が必要である。特にベトナム市場などでは、「ニイサン、ニイサン」「ネエサン、ネエサン」「トウサン、トウサン」とやたらと話しかけて来る。これは、ある意味ベトナムらしい面であり、楽しいことではあるのだが、疲れた時や体調が悪い時などの気持ち

に余裕がない場合には非常にうっとうしい。また、毎回、価格交渉をすることも疲れる。

ベトナムへ行くまでは、ベトナム料理といえばフォー(米のうどん)や春巻かと思っていたが、現地で生活して感じたのは、新鮮な魚介類を煮たり、炒めたり、蒸したりと簡単に調理した料理がとても美味しいことである。これは、日本国内にあるベトナム料理店では恐らく味わえないのではないかなと思う。

ホーチミン市内では、日本人観光客を良く見かける。日本語のガイドブックを持ってうろうろしているのを目撃している。特に若い女性のグループが多いようだ。ある日の昼休みのことである。仲間の一人が目前の日本人の女性グループにネイティブの日本語で「どこから来たの?」と尋ねた。すると、これまたネイティブの日本語で「日本」との答え。我ら一同「・・・」。彼女たちの目には、我々は日本人に映らなかったのだろうか。

8. 愛すべき国ベトナム

以上、現地で体験した出来事を色々書いたが、ベトナムのことが嫌いかということは決してない。むしろ短い間ではあるがベトナムに滞在し、ベトナムを好きになった。自分にとって「ベトナムの魅力とは何であろうか」と自問自答してみる。ベトナム料理も美味しいし、買い物、観光も楽しいのだが、やっぱり何より面白いのは滞在中に出会ったベトナムの人達である。エネルギーで思い込みの激しい彼らの行動は、時に日本人である我々に奇異に映る。しかしながら、逆に考えると、ベトナム人も我々日本人の行動を奇異に感じているに違いない。

滞在中には様々なトラブルがあったとはいえ、いずれも克服することができた。今となっては良い経験である。我々は海外で業務を行う上で、こうした文化の違いや意思疎通の難しさがあることを重々理解して取り組む必要がある。

ベトナム人の国民性を表現する言葉に「4K」というものがあるそうだ。①器用、②向学心旺盛、③近視眼的、④カカア天下、だそうである。確かにベトナム人とさまざまな局面で付き合う中で、この4Kについてはなるほどと感じることが多々ある。

このような愛すべきベトナムの人々と共に仕事をする機会を得て、貴重な体験ができたことに感謝したい。そして、いつの日か彼の地を再び訪れてみたいと思っている。皆様も「愛すべき国ベトナム」へ是非行ってみたい。色々楽しめること請け合いです。